



TITLE:

資本の国際化の方法的模索(上) - C・パロワの所説によせて -

AUTHOR(S):

奥村, 和久

CITATION:

奥村, 和久. 資本の国際化の方法的模索(上) - C・パロワの所説によせて
-. 経済論叢 1982, 130(1-2): 50-71

ISSUE DATE:

1982-07

URL:

<https://doi.org/10.14989/133937>

RIGHT:

經濟論叢

第130卷 第1・2号

販売過程とマーケティング過程	橋 本 勲	1
日本曹達の工場展開	下 谷 政 弘	21
資本の国際化の方法的模索(上)	奥 村 和 久	50
貿易自由化前夜のフランス綿工業	清 水 克 洋	72
レーヴェ社における工場管理	幸 田 亮 一	97

昭和57年7・8月

京都大學經濟學會

資本の国際化の方法的模索(上)

—— C・パロワの所説によせて——

奥 村 和 久

目 次

はじめに

- I 資本の国際化の課題設定
 - 1 基礎範疇と基礎視座
 - 2 機能的アプローチと有機的アプローチ
- II 資本活動の国際化の現段階の特徴と資本循環論
 - 機能的アプローチ I——
 - 1 多国籍企業と資本の国際化の現段階の諸指標
 - 2 資本循環の国際化とその適用上の問題点
- III 多国籍企業の批判的解明と社会関係としての資本の国際化
 - 機能的アプローチ II と有機的アプローチ——
 - 1 機能的アプローチ II
 - 2 有機的アプローチ……以上(上)
- IV 世界経済の段階規定と資本の国際的蓄積様式……以上(下)

は じ め に

第二次大戦後、とりわけ1960年代以降、資本の活動の世界的展開は多国籍企業の誕生と発展によってその新段階を闊した。国連報告によれば、1971年度の多国籍企業在外子会社生産額3,300億ドルは 全市場経済諸国の輸出総額3,100億ドルを上回り、アメリカについて見れば、前者1,700億ドルは後者440億ドルの4倍に達している¹⁾。これら諸指標は、資本主義世界市場＝国際分業編成の主要原理が、今日、国際貿易から多国籍企業形態をとった直接的生産過程の国際化へとその比重を移行させつつあることを端的に語りだしている。かかる

1) U. N. Dep. of Economic and Social Affairs, *Multinational Corporations in World Development*, 1973, p. 14, p. 159

事態は、「直接に資本の概念それ自体のうちに与えられている世界市場創造傾向」²⁾が単に「流通圏域の拡大」³⁾のみならず、「生産圏域の拡大」⁴⁾を含むに至り、資本主義史上始めて資本がその概念にふさわしい世界性＝国際化を獲得したことを告知するものである。

それゆえこのことは、資本の国際化の現段階的特徴として示された上記事態を、資本主義的搾取の最新の変貌として資本の概念規定からとらえ直し、かつ、その変貌の歴史的位置づけを確定する作業を主要課題として呼び起こす。そしてその際、上記両圏域の国際化をとともに理論化しうる視座の構築が求められているのである。本稿がクリスチャン・パロワ『資本の国際化——批判的基礎』⁵⁾の紹介を試みるのも、彼がかかるとする課題を資本一般の理論的核心たる再生産＝蓄積論に基づいて展開しているからに他ならない。

本稿は以下に、彼の上記理論展開が含意する諸論点を明示化・整序して紹介するとともに、必要な場合には若干の検討と私見の提示をまじえながら論をすすめるものである⁶⁾。

2) K. Marx, *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie*, Dietz Verlag, 1953, S. 312, 高木幸二訳『経済学批判要綱』II 336ページ、以下 K. Marx, Gr. SS. ××, II ××ページと略記。

3) *Ebenda*, S. 311, II 335ページ。

4) *Ebenda*, S. 312, II 336ページ。

5) Christian Palloix, *L'internationalisation du capital: éléments critiques*, François Maspero, 1975 以下、本書からの引用は、C. Palloix, *op. cit.*, pp. ××と略記する。本稿は主として同書の紹介にあてられているが、必要に応じて C. Palloix, *L'économie mondiale capitaliste et les firmes multinationales*, François Maspero, 1975 (以下 C. Palloix, *Les firmes multinationales*, *op. cit.*, pp. ××と略記) からの引照と対質もあわせ行なう。同著作の刊行年次は同じであるが、後者は *L'économie mondiale capitaliste*, 2 Vol., François Maspero, 1971 および *Les firmes multinationales et le procès d'internationalisation*, François Maspero, 1973 を絶版にして合本したもので、執筆時期には2～4年の開きがあり、その間にはパロワの理論的認識の深化がみられる。尚、パロワの著作目録一覧に因しては、若森孝孝「資本の国際化の経済学批判」(『経済評論』1980年3月号) 106～7ページの注10を参照。

6) パロワについては、すでに、野村昭夫「資本の国際化とその意義——最新の資本主義の変貌」(『経済評論』1979年6月号)が C. Palloix, *Les firmes multinationales*, *op. cit.*, の理論的枢要部たる第13章「資本の国際化について」中の英訳部分 The Internationalization of Capital and the Circuit of Social Capital, Hugo Radice ed., *International Firms and Modern Imperialism*, Penguin Books, 1975 にもとづいて、また前掲若森論文が C. Palloix, *op. cit.*, を中心として、すぐれた紹介を試みている。両論稿とも、パロワが多国籍企業形態をとった資本

I* 資本の国際化の課題設定

1 基礎範疇と基礎視座

パロワの全問題構成の基礎、それは世界的規模での階級対抗と階級同盟の構造を資本の国際化の批判的分析から理論化することにある。それゆえ彼は、『資本の国際化』の冒頭を次のような課題設定によって始める。

「資本の国際化とは何か？ [1] 資本のあるがままの社会関係の地理的・空間的拡張（国際化）の水準にとどまり、その諸形態を把握することが重要なのではない〔機能的アプローチ〕。[2] 重要なこと、それは社会関係としての資本の運動を説明し、世界的次元に位置づけられた必要労働（プロレタリアートとその同盟者たる農民）と剰余労働（資本家とその同盟者によって領有される）との分割において社会諸階級を説明しうる方法、諸概念が与えられることである〔有機的アプローチ〕。』⁷⁾

パロワはこのような課題を、資本の世界市場運動（外国貿易・対外証券投資・対外直接投資）とそれが編成する国際分業＝世界市場構造との関連で解明しようと試みる。そして「資本の国際的蓄積様式」⁸⁾がそのための基礎範疇として措定されるのである。この範疇は、上記資本の世界市場運動を剰余価値拡大に対する制限の国際的解決形態として、生産過程と流通過程の統一たる再生産＝蓄積過程においてとらえ、剰余価値抽出諸条件の拡大をこの資本活動の国際的展開によって形成される世界的レベルでの分業に内蔵された種差的＝不均等編成において把握しようとするものである。したがってこの範疇は、国際的分業の種差的編成に対応した階層間格差を含む世界的次元での階級構造が、資

資本の国際化の分析に際して、K. マルクス『資本』第2巻の資本循環論に依拠していることに注目し、それは、(i) 資本の国際的運動諸形態析出、および(ii) 社会関係としての資本の国際化開示の理論——さらに若森論文においては(iii) 階級闘争解明の理論——として用いられていることを提示した先駆的労作である。本稿はこの両論稿に学びつつ、(i) (ii) (iii) における論理次元の相違、ならびに資本の国際的蓄積様式に応じた世界経済の歴史的段階区分に関して新たな紹介と検討を加えることに力点を置きたい。

7) C. Palloix, *op. cit.*, p. 11. 尚、[]は引用者によるもの。

8) Cf. *ibid.*, pp. 59-60, pp. 89-98

本による剰余価値抽出＝搾取諸条件の拡大の問題として措定されねばならないことを示している。パロワは、Å. G. フランク、S. アミン等の新従属学派によって提起された資本主義世界経済の矛盾たる中心／周辺部関係と世界的規模での階級構造総体の同時的・統一的把握という課題を⁹⁾、不断の価値増殖をめざす「資本自身の本性」¹⁰⁾から導かれた階級対抗と階級同盟の種差的＝階層間格差構造として総括し、理論化しようとしているのである。

その際注目すべきは、パロワがこの範疇をマルクス『資本』第2巻の資本循環論を基礎視座として展開していることにある。彼は世界的規模での分業編成の担い手たる資本の世界市場運動を、資本の姿態変換過程を構成する各部分諸段階の国外移転——流通過程の国際化＝国際貿易、生産過程の国際化＝対外直接投資——、あるいはこの過程において形成される蓄蔵貨幣＝過剰貨幣資本の国際化——対外証券投資——として、循環過程運動に即して統一的に把握する。それゆえこの視座は、資本概念のうちに与えられている流通圏域・生産圏域の国際的拡張をとともに、再生産＝蓄積過程としての循環過程総体＝「資本の価値増殖循環の全局面」¹¹⁾において展開される剰余価値抽出諸条件の拡大に関わるものとして認識する。またそれは資本主義世界経済の歴史的諸段階を、各時代を代表するそれぞれの資本の世界市場運動——自由貿易帝国主義＝貿易、レーニン段階帝国主義＝証券投資、現代帝国主義＝直接投資——とそれに対応した分業構造＝資本による搾取様式の段階的変容として説明する。多国籍企業形態をとった資本の世界的レベルでの搾取および階級構造の最新の変貌を解明し、その歴史的位置づけを与えようとする試みが、このような歴史理論の射程をカバーしうる視座を要請しているのである。

パロワは上記基礎範疇と基礎視座に立脚した資本の国際化の理論展開を「資

9) こうした課題に焦点をあて新従属学派の諸理論を整理したものとして、湯浅起男『第三世界の経済構造』新評論、1976年、および若森卓孝「新帝国主義モデルと階級理論」（『経済評論』1979年9月号）を参照。

10) K. Marx, Gr. S. 313, II 338 ページ

11) C. Palloix, *op. cit.*, p. 91

本の国際化の有機적アプローチ」¹²⁾と命名する。しかしながら彼は最初からこのアプローチにもとづいて課題の展開を試みているわけではない。彼はまず、多国籍企業がその編成主体である現代世界経済に関する表象を「資本の国際化の機能的アプローチ」¹³⁾と呼ばれる経験的方法を採用して整理し、ついで有機的アプローチによってその表象を階級闘争との関連で批判的に解明する。そしてその後、再び有機的アプローチから世界経済の各歴史段階を顧みつつその現段階を再把握するのである。

本稿は以下この順序に従ってパロワの論述を整理する。だがその前に後論との関係で必要な限りにおいて両アプローチの論理次元に関わる区別を簡単に指摘しておきたい。

2 機能的アプローチと有機的アプローチ

資本の国際化を搾取率拡大の必然的一契機として認識し、国際的次元に位置づけられた階級闘争との関連で解明するか、否か、それが両アプローチの論理次元を区別する理論的基軸をなしている¹⁴⁾。

すでに見たように有機的アプローチでは、「国際化は資本の概念に内在的なモメント」¹⁵⁾として「剰余価値率の形成と拡大の諸々の制限から生まれる」¹⁶⁾ものととらえられていた。そして資本の世界市場運動＝過程と種差化を含む国際分業＝階級構造が、剰余価値拡大の必然的条件を形成するものとして把握されようとしていた。ここで特に指摘せねばならないことは、パロワがこの世界的規模での過程＝および構造的連関を、資本関係に規定された国際的生産諸力として理解していることである。彼は剰余価値の形成と拡大が単に生産諸力それ自体の発展によって規定されるのではなく、また逆に、生産諸関係も生産諸力

12) *ibid.*, p. 153

13) *ibid.*

14) これら両アプローチの区分は、パロワがかつての自己の諸著作、ならびに現代マルクス主義者の資本の国際化へのアプローチを批判的に検討するなかから確立したものである (C. Polloix, *op. cit.*, pp. 38-53; *Les firmes multinationales, op. cit.*, t. I pp. 7-8). また彼の自己批判に言及した前掲若森論文「資本の国際化の経済学批判」94-95ページ、104-105ページを参照。

15) C. Polloix, *op. cit.*, p. 52

16) *ibid.*, p. 49

との全連関を離れて単独には剰余価値の生産諸方法を規定しえないことを強調する。そして両者の内的連関によって成立する資本としての生産諸力こそ、資本による搾取過程とそこに内包された階級的諸敵対の具体的分析を果たしうることを指摘し、それを史的唯物論の基調テーゼとして掲げる。「史的唯物論は生産諸関係の優位のもとでの生産諸関係と生産諸力の相互入り子構造のダイナミックな過程の表現である。」¹⁷⁾ 上記過程＝および構造的連関において形成される資本としての国際的生産諸力の実存諸形態は、このテーゼの具体的展開形態であり、世界的規模での剰余価値抽出の諸方法と階級闘争の諸形態を表現するものに他ならない。したがって有機的アプローチは生産諸関係と生産諸力の内的連関をその論理次元とし、かつ、世界的次元に位置した階級闘争が資本としての国際的生産諸力そのものの矛盾のかつ敵対的性格の自己表現であることを批判的に解明しようとするものである。この意味で、このアプローチは「資本の国際化の経済学批判」¹⁸⁾に他ならない¹⁹⁾。

それに対して、有機的アプローチの否定が機能的アプローチの規定をなしている。それゆえこのアプローチにおいては、資本の国際化は社会＝階級関係としての資本の矛盾的运动と密接不可分に結合したのではなく、したがってまた、国際的レベルでの階級闘争の諸形態を分析しうるものではない。ここでは、資本の国際化は、「資本がその運動の帰結として獲得した諸形態にのみ関係があり、〔社会関係としての〕資本それ自体に含まれ、それから切り離しえない過程ではないのである。」²⁰⁾そしてパロワは、このように階級対抗の外的表現形態として理解されていない国外で展開する資本の運動諸法則とその矛盾の単な

17) *ibid.*, p. 36

18) *ibid.*, p. 63

19) 生産諸関係と生産諸力の内的連関について解明したものとして次の諸著作を参照。L. アルチュセール/E. バリバル、植率/神戸仁彦訳『資本論を読む』合同出版、1974年、第Ⅲ部。L. アルチュセール、西川長夫訳『自己批判——マルクス主義と階級闘争』福村出版、1978年、第Ⅱ部。E. バリバル、今村仁司訳『史的唯物論研究』新評論、1979年、第Ⅲ部。平田清明『マルクスにおける生産諸力の概念について——生産諸力の弁証法』(1)(2)(3)『経済論叢』第122巻第5・6号、1978年、第123巻第1・2号、同第3号、1979年)。

20) C. Palloix, *op. cit.*, p. 38

る対象的認識を、「資本の国際化の経済学」²¹⁾＝「経済偏重主義」²²⁾として批判する。彼自身明確に区別しているわけではないが、我々はこのアプローチを、それが問題とする論理次元に応じてさらに以下の二つに細分することが可能である。

第一のものは、資本の国際化を、社会関係としての資本との、したがってまたそれに規定された生産諸力との関連を有しない次元において分析するものである。我々はそれを機能的アプローチⅠと呼ぼう。

第二は、資本＝社会関係と資本の国際化の関連がその視野に収められたものである。だがこのアプローチも、資本関係をあたかも生産諸力とは独立・無関係に存在するかのように扱い、前者が後者においてのみ現実存在しうることを看過している。したがってそれは資本による搾取の具体的諸条件と階級対抗の現実的諸形態を解明しえない。この意味でそれは、社会＝階級関係としての資本を十分に分析しえず、「資本の国際化の経済学批判」が不徹底なものに他ならない。パロワが機能的アプローチと有機的アプローチの混同したものと評するゆえんである。我々は生産諸関係との関連を有し、生産諸力とは切り離されたこの見地＝論理次元を機能的アプローチⅡと命名する。

これら両機能的アプローチはその論理次元からしてすでに指摘した欠陥を免れえない。だがそれらは有機的アプローチによって補完されるべく措定される時、それ独自の意義を一定限度内においてもつものである。そして注意すべきは、パロワが有機的アプローチのみならず両機能的アプローチにおいても、それら論理次元に対応した資本循環視座を——有機的アプローチとは異なった方法を用いて——、資本の国際化の分析基準として適用すべく模索していることにある。我々は章を改め、そのようなパロワの理論的営為を紹介・検討する。

21) *ibid.*, p. 52

22) *ibid.*, p. 37

II 資本活動の国際化の現段階的特徴と資本循環論

——機能的アプローチⅠ——

資本の国際化を国境を越えて展開する資本の運動としてとらえることによって世界経済の現段階的特徴を析出すること、それが本章の課題である。パロワはこうした国境外での資本の活動を、さしあたり生産諸関係、生産諸力とは切り離された論理次元にある機能的アプローチⅠの視点から、資本の三循環形態（貨幣資本循環・生産資本循環・商品資本循環）を用いて表示しようと試みている。したがって我々はまず、パロワが統計的数値によって整理した資本の国際的活動の現段階像＝多国籍企業段階像を紹介し、ついで彼がそうした表象に資本循環論を適用する場合の問題点を指摘・検討する。その際我々は『資本主義世界経済と多国籍企業』および『資本の国際化』の比較検討をあわせ行なう。けれど、前著においても機能的アプローチ（Ⅰ・Ⅱを含む）という命名を伴わないとはいえずに資本循環形態の適用が企図され、また両著作間には適用すべき循環論の整序過程が存在し、先の検討に一つの手がかりを与えているからである。

1 多国籍企業と資本の国際化の現段階の諸指標

近年、国際分業形成の担い手である資本の国際的活動はその主要動向を国際貿易から生産の国際化へと移行させつつある。パロワはこの動向を国際貿易、国際的貨幣資本移動、多国籍企業子会社の在外生産のそれぞれにつき統計的数値から検証する。

第一に、国際貿易に関して言えば、それが1971年には3,110億ドルに達し、その30%が多国籍企業内取引によって占められていることを指摘する。第二に、直接投資へと向かう貨幣資本の国際的移動が問題とされ、それが同年に1,650億ドルにのぼることが示される。そしてパロワは、その増加率、部門別・地域別投資構造を明らかにしつつ、1960年代末葉以来、アメリカの対先進諸国製造業への直接投資が停滞し、低開発諸国の製造業に向けられたその比重が増大し

つつあることに注目するのである。第三に、多国籍企業の在外子会社生産額では、その3,300億ドルが同年の貿易輸出額を凌駕していること、特にアメリカの場合には前者(1,720億ドル)が後者(430億ドル)の4倍に達していることが指摘され、国際収支論にもとづいてのみ現代世界経済をとらえようとする試みに反省が促がされている²³⁾。

その際、パロワの特徴は、彼がこれら資本の国際的活動を、「社会的資本の循環の広がり」の国際化²⁴⁾、あるいは「社会的資本の価値増殖の国際化」²⁵⁾として、マルクスの資本三循環形態を用いて表示しようと試みていることである。彼は商品資本循環 $W' \cdots W'$ の国際化を、「資本主義的生産様式の確立とともに国際化された最初の循環であり、新古典派の国際貿易理論が説明しようとするもの」²⁶⁾ととらえる。また、貨幣資本循環 $G \cdots G'$ の国際化は「国際的投資形態をとった貨幣資本の国際的価値増殖」²⁷⁾²⁸⁾を、生産資本循環 $P \cdots P$ の国際化は「国際的生産」²⁹⁾＝直接的生産過程の国際化を示すべく用いられている。

資本の国境外での活動がこのように資本の各循環形態で析出されようとするとき、世界経済の最新の段階は、 $W' \cdots W'$ 、 $G \cdots G'$ のみならず、 $P \cdots P$ の国際化にまで到達しているものとして特徴づけられる。そして、この多国籍企業形態をとった直接的生産過程の国際化こそまた、直接投資と企業内国際取引を増大させることによって、貨幣資本の国際的移動＝ $G \cdots G'$ の国際化(直接投資)と世界貿易＝ $W' \cdots W'$ の国際化の促進要因となっているのである³⁰⁾。

23) *ibid.*, pp. 67-73

24) C. Palloix, *Les firmes multinationales*, *op. cit.*, t. II, p. 224

25) C. Palloix, *op. cit.*, p. 67

26) *ibid.*, p. 68

27) C. Palloix, *Les firmes multinationales*, *op. cit.*, t. II, p. 228

28) パロワは貨幣資本の国際的移動＝ $G \cdots G'$ の国際化を、それが直接投資 $G \cdots G'$ に向けられるか(例えば世界経済の現段階を説明する場合)、あるいは証券投資 $G \cdots G'$ に向けられるか(例えばレーニン段階帝国主義の特徴を示す場合)を問わず、 $\Delta G = g$ をもたらすものとして文脈に応じてその双方に用いている。

29) C. Palloix, *op. cit.*, p. 72

30) 企業内国際分業＝取引が外国貿易に及ぼす影響とその構造に関しては以下のものを参照。杉本昭七『現代帝国主義の基本構造』大月書店、1978年。野村昭夫「生産と経済活動の国際化」(片山謙二編著『セミナー世界経済の常識』日本評論社、1978年)および同著前掲論文。関下稔「多国籍企業と国際貿易」(久保新一・中川信義編『国際貿易論』有斐閣、1981年)。

さらにパロワはこのような資本循環形態による資本の国際的活動の表示を、世界経済の歴史的段階区分の指標としても援用する。彼は多国籍企業段階からそれ以前の資本の国際的活動を顧みつつ、「自由競争段階」³¹⁾においては $W' \cdots W'$ の国際化を、「レーニン段階帝国主義」³²⁾では $G \cdots G'$ の国際化（証券投資）を、それぞれの段階を代表する区別の特徴として析出する。それは国際分業形成の主要な担い手が $P \cdots P$ の国際化としてある現段階の歴史的位置を、各資本循環形態による表示・比較によって、より鮮明に描出しようとする試みに他ならない³³⁾。

2 資本循環の国際化とその適用上の問題点

しかしながらパロワは各資本循環形態を上記のように用いるにあたって、何らその適用に関する説明を行なっているわけではない。したがってその適用の妥当性そのものが問われねばならない。

まず第一に、資本の運動は三循環形態の統一としてあり、各々の形態は現実には分離されえないものとしてあることが注意されるべきであろう。「各々の特殊的循環は他のそれを（含蓄的に）前提するばかりでなく、ある形態での反復は他の形態での循環のコースを含んでいる」³⁴⁾からである。したがって各循環形態によって資本の国際的活動を表示するためには、現実的統一をなしている三循環を相互に排他的に分離するという論理的操作が必要なのである。第一の問題点は、パロワがこうした適用上の限定を行なっていないことである。

また第二に、各々の循環形態についてみても、そのいずれれもが生産過程と流通過程の統一としての再生産過程であり、それを構成する各部分諸段階

31) C. Palloix, *op. cit.*, p. 77

32) *ibid.*, p. 78

33) 資本循環の国際化による時期区分は C. A. ミシャレによっても試みられている。彼は、「商品資本循環と貨幣資本循環の国際化によって支配される国際経済から、生産資本循環の国際化を開始する世界経済への移行」として、流通過程の国際化と生産過程の国際化の二段階区分を提起するのである。C. A. Michalet, *Le capitalisme mondial*, Presses Universitaires de France, 1976, p. 227.

34) K. Marx, *Das Kapital*, II, Marx Engels Werke, Bd. 24, Dietz Verlag, 1962, S. 106, 長谷部文雄訳『資本論』⑤, 青木文庫, 133ページ。以下 K. Marx, K. II, SS. $\times \times$, ⑤ $\times \times$ ページと略記。

($G-W$, P , $W'-G'$) 相互の内的連関を含んでいる。それゆえ彼が各循環形態の国際化を語る場合、その各々の形態が各部分諸段階の過程的統一としての総過程の国際化を意味するがゆえに一つの陥穽が存在する。たとえば、パロワによって資本主義の初発から国際化されたものとして指摘される外国貿易= $W'\cdots W'$ の国際化は、適用方法に関する限定がないならば、生産過程をも含む各部分過程総体の国際化を意味してしまう。したがって $W'\cdots W'$ の国際化は資本主義の成立とともに直接的生産過程が国際化していることをも含意してしまうのである。こうしたことは他の循環諸形態についてもあてはまり、それらは何ら資本の国際的活動の特徴を表現しえないのである。

以上の二点からすれば、各資本循環形態の国際化が資本の国際的活動を表示しうるのは、その各々の形態が相互に排他的に分離・固定され、そのことによって各形態のもつ一面的特徴のみが——各形態を構成する部分諸段階の相互的連関なしに——没概念的に示される場合に限られるのである。

確かにパロワはこのような限定を明記してはいない。そしてその限りで循環論の適用に関して誤解の余地を残している。にもかかわらず先の両著作の間にはパロワ自身における理論的深化の過程が見られ、この過程のうちに循環論適用上の限定が暗示されている。我々はこの暗黙のうちに了解された限定を検出するために、まず両著作間の項目編成の推移を検討する。そのため当該箇所を一覧表にして以下に記すが、次章以降の便宜をも考えあわせ、本稿で扱う領域を一括表示しておきたい。

第1表で本章の該当領域たる「社会的資本の循環の広がり」の国際化」と「社会的資本の価値増殖の国際化」を比較すれば、 $G\cdots G'$ の国際化→ $P\cdots P$ の国際化→ $W'\cdots W'$ の国際化という展開序列から、 $W'\cdots W'$ の国際化→ $G\cdots G'$ の国際化→ $P\cdots P$ の国際化という順序への推移が存在する。つまりマルクスの展開序列に依拠したものから、資本活動が国際化していく歴史的継起への編成替えが見られる。このことは三循環形態の間に論理的展開基軸が不在となり³⁵⁾、

35) マルクス資本三循環形態の展開序列の間に、過程的資本の再生産過程論から再生産構造論へ

第 1 表

資本主義世界経済と多国籍企業	資本の国際化
1 社会的資本の循環の広がりでの国際化 a) 貨幣資本循環 b) 生産資本循環 c) 商品資本循環	1. 社会的資本の価値増殖の国際化 a) 商品資本循環の国際化 b) 貨幣資本循環の国際化 c) 生産資本循環の国際化
2 社会関係としての資本の国際化 a) 価値増殖過程における資本の国際化： $G \rightarrow A/G \rightarrow P_m$ b) 価値増殖した資本の国際化： $w \rightarrow g \rightarrow w/W \rightarrow G \rightarrow W$ c) 生産過程と労働過程の国際化	2 社会関係としての資本の国際化 2.1 資本の国際化の機能的アプローチ a) 価値増殖過程における資本の国際化： $G \rightarrow A/G \rightarrow P_m$ b) 価値増殖した資本の国際化： $w \rightarrow g \rightarrow w/W \rightarrow G \rightarrow W$ 2.2 資本の国際化の有機的アプローチ
	3 資本の国際的蓄積様式 a) 相対的剰余価値に対する絶対的剰余価値生産の優越にもとづく「古典的」すなわち「国民的」蓄積様式 b) 流通支配に投資された貨幣資本輸出（レーニン）にもとづく資本の国際的蓄積様式 c) 生産に投下された資本輸出（生産の国際化）にもとづく資本の国際的蓄積様式

各形態が相互に無関係な単なる類型比較へと還元されていく過程を示している。

こうした過程は両著作問の内容上の相違にも表われている。『資本主義世界経済と多国籍企業』では、社会関係としての資本とは切り離された論理次元で資本の国際的活動を析出する際に、すでに排他的形態としての $G \cdots G'$ のみならず、「産業資本の循環の一般的形態」³⁶⁾としての $G \cdots G'$ の一部分過程たる $G \rightarrow W \left\{ \begin{smallmatrix} A \\ P_m \end{smallmatrix} \right.$ の説明がなされていた³⁷⁾。「貨幣資本形態をとった資本の価値増殖の国際的広がりとは、社会関係としての資本の国際化という前提条件を想定する

＼の論理的展開基軸を抽出したものとして平田清明「貨幣資本の循環」、『貨幣資本循環と生産資本循環』、『商品資本の循環』、『三循環の統一と流通時間（費）』（『経済セミナー』1980年12月、1981年1、2、3月）を参照。

36) K. Marx, K. II, S. 67

37) 排他的・没概念的形態としての $G \cdots G$ と、「一般的形態」としてのそれとの区別に関しては、安孫子誠男「マルクス資本循環論の一考察——『資本論』第2部第4篇第5稿の検討を中心として——」（『経済科学』第23巻第2号、1976年）、前掲平田「経済セミナー」論文を参照。

ことに注意を向けよう。事実、貨幣資本循環の初発における $G-W$ は $G-A$ (労働力の購買) と $G-P_m$ (生産手段の購買) に分かれる。それは資本主義的生産様式の基本的生産関係なのである。³⁸⁾ このような叙述においては、貨幣資本循環の国際化は直接的生産過程の国際化とそれが遂行されるための国際的レベルでの社会的条件を含意している。したがってそれは没概念的な貨幣資本の国際的移動を表現しえない。『資本の国際化』では、こうした叙述は「社会的資本の価値増殖の国際化」から消滅し、第Ⅲ章で検討するような「社会関係としての資本の国際化」³⁹⁾を説明するものとして用いられている。したがってこのことも各循環形態の排他的形態への還元を暗示しているのである。

国境を越えて展開する資本の運動を生産諸関係・生産諸力から切り離された経験的・悟性的レベルで析出する機能的アプローチⅠは、このような資本循環論適用に関する理論的彫琢を経て、資本の国際化の現段階的特徴を排他的・一面的に固定された各循環形態によって描出するのである。

III 多国籍企業の批判的解明と社会関係としての資本の国際化

——機能的アプローチⅡと有機的アプローチ——

国境を越えて展開する資本の運動諸形態はさしあたり各資本循環形態の類型比較によって提示することができた。そしてこのような視角からすれば、資本主義世界経済の現段階はなによりもまず $P\cdots P$ の国際化をその区別の特徴とすると同時に、この $P\cdots P$ の国際化が $W'\cdots W'$ の国際化と $G\cdots G'$ の国際化(直接投資)の促進要因となっているものとして示された。

だがこのようにして析出された資本の国際的活動は、その論理次元とそれに照応する各資本循環形態の排他的・一面的特徴の適用から生ずる帰結として、社会＝階級関係としての資本の運動形態であることが無視され、幻想的＝物神の性格を帯びたものとして示されざるを得ない。それゆえこれら資本活動の国

38) C. Palloix, *Les firmes multinationales*, *op. cit.*, t. II, p. 238

39) C. Palloix, *op. cit.*, p. 158

際的展開に関する記述＝「資本の国際化の経済学」は、新生産物（ $W' \cdots W'$ ）・技術革新と技術移転（ $P \cdots P$ ）・金融的移転（ $G \cdots G'$ ）等々による成長の伝達といった「新々古典派の古びた成長伝達理論」⁴⁰⁾の陥穽に陥る危惧を宿している。したがってこうした資本活動の国際的展開につき、そのそれぞれが社会関係としての資本に対してもつ意義の解明が、つまり「資本の国際化の経済学批判」が要請されねばならない。だが各々の運動形態に関するかかる考察は第四章に譲り、本章ではもっぱら多国籍企業の区別的特徴をなす生産過程の国外移転にその検討を限定する。それは $P \cdots P$ が排他的・一面的に固定されたときに有する自然主義的＝物神的性格の批判的解体であり、この $P \cdots P$ の国際化として特徴づけられた多国籍企業の批判的解明である。

パロワはこうした課題を次の二つのアプローチから展開する。彼はまず、生産諸力とは切り離された生産関係の論理次元をもつ機能的アプローチⅡによって、多国籍企業を資本主義的生産＝階級関係そのものの国際化としてとらえる。だがすでに第Ⅰ章で見たように、このアプローチは「資本の国際化の経済学」とその経済学批判の中間をなすものであり、いまだ資本主義的搾取の現実的諸形態の説明を果たしうるものではない。したがって彼はつぎに、有機的アプローチにもとづいて多国籍企業形態をとった搾取の具体的過程を生産諸関係と生産諸力の統一の見地から考察するのである⁴¹⁾。

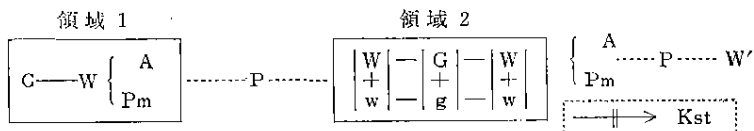
1 機能的アプローチⅡ

このアプローチは、多国籍企業形態をとった直接的生産過程の国際化が資本／賃労働関係の国際的創出と拡張に他ならないことを開示するものである。そ

40) *ibid.*, p.66

41) このような機能的アプローチⅡ→有機的アプローチなるパロワの論理展開は、E. バリバルのマルクス『資本』解釈を国際的次元に押し広げたものと類似している。参照。「マルクスはまず第一に基本的な生産諸関係の定義（労働力の売買、労働力の生産的消費による剰余価値の生産、すなわちそれが含む搾取と社会諸関係の一般形態）、つまり資本主義の歴史における生産諸力の発展がどうであれ陳述できる定義を定式化し、つぎに生産諸力の発展を支配し説明する絶対的、とくに相対的剰余価値の諸形態の〈派生的〉分析（協業、マニュファクチュア、大工業）を与える。」（E. バリバル前掲書、192ページ）

第 1 図



〔注〕 []内は筆者が挿入したもの。—||—>消費過程。Kst 資本家。

〔典拠〕 C. Palloix, *op. cit.*, p. 159 から転載⁴³⁾

の際、パロワは第1図において示されるような「社会的資本の総循環」⁴²⁾を分析装置として採用している。それはもはや前章で見たような排他的に固定され、一面的特徴をもった資本循環形態ではない。ここで援用される総循環は $G \cdots G'$ の反復において他の循環諸形態を含み、かつそれを構成する各部分段階の内的連関を問うべく措定されているからである。彼はこのような総循環に拠りつつ、国際化した生産過程のもつ階級的性格を暴露する。だが彼はこの階級的性格を生産過程そのものにおいてではなく、この過程に先行および後続する流通過程たる領域1・2において検出しようと試みているのである。

i 価値増殖過程における資本の国際化： $G—A/G—Pm$

領域1で示される「価値増殖過程における資本の国際化」⁴⁴⁾は、労働力と生産手段の国際的レベルでの分離と貨幣資本によるこれら二要因の国際的購買を端的に表現している。それは後続する国際化した生産過程の階級的性格を明らかにすべく設定されたものである。

a. そのうちパロワはまず $G—A$ の国際化、すなわち賃労働関係の国際的普遍化に着目し、それを国際的レベルでの貨幣資本の生産資本への転形の条件としてとらえる。したがってこの $G—A$ の国際化に媒介される多国籍企業形態をとった生産過程の国外移転は資本関係の国際化そのものに他ならない。我々はここにマルクスの次の一節を想起してよいであろう。「資本関係が生産過

42) C. Palloix, *op. cit.*, p. 159

43) 以下、典拠を示さない場合は、筆者がパロワの立論のうちに読みとって作製した図を示す。

44) C. Palloix, *op. cit.*, p. 160

程中に出て来るのは〔生産過程の国際化が資本関係の国際化としてあるのは〕、資本関係自体が流通行為のうちに、購買者と販売者とが対応しあう相異なる経済的根本条件のうちに、彼らの階級関係のうちに、実存するにすぎないからである。〕⁴⁵⁾

このように資本主義的生産過程＝価値増殖過程の国際化を G—A の国際化においてとらえるパロワの視角から、多国籍企業によって購買される国外労働者数が階級関係の国際化を計る指標として提示される。そしてその場合、移民労働者の問題も国境内に内部化された資本関係の国際化として彼の視野に収められるのである。したがって彼は、アメリカ最大500社の多国籍企業の G—A なる行為に関し、国内雇用数と国外雇用数をそれぞれ1,500万、1,200万～1,300万として例示する。またフランスのサン・ゴバン・ポンタ・ムッソンの雇用全体30,000について、国内雇用18,000、後者から移民労働者を差し引けば全体の50%が外国人労働者によって占められている事実が指摘されるのである⁴⁶⁾。

いずれにせよ、資本関係の国際的普遍化は資本による自由な労働者の世界的レベルでの創出を前提としている。「ブルジョアジーは自己の姿に似せて一つの世界を創り出す」⁴⁷⁾というマルクスの有名な一節は、多国籍企業段階において始めてその普遍的＝国際的妥当性を確証する。G—A の国際化はその最も直載な表現である。

b. 次に、G—Pm なる行為の国際化が G—A の国際化と平行して進行していることが指摘される。生産過程の国際化は、資本の機能形態としての貨幣がAとPmを国外で購入し、生産資本の諸要素として結合するところに成立するからである。

パロワは、この Pm の購入の場合に見られる相異なった国民的起源をもつ

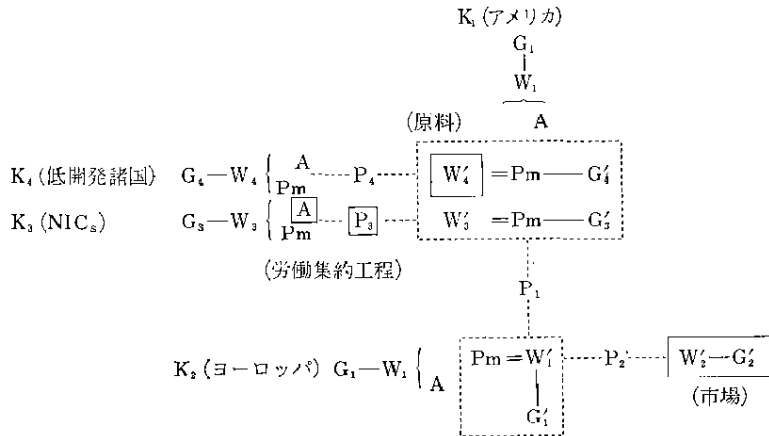
45) K. Marx, K. II, S. 37, ⑤ 46 ページ。

46) C. Palloix, *Les firmes multinationales, op. cit.*, t. II, pp. 236-239

47) K. Marx/F. Engels, *Manifest der Kommunistischen Partei*, Marx Engels Werke, Bd. 4, Dietz Verlag, 1959, S. 466, 『マルクス・エンゲルス全集』第4巻、大月書店、1960年、480ページ。

第3図において、 K_1 をアメリカ多国籍企業本社、 K_2 , K_3 , K_4 をそれぞれヨーロッパ、NICs、原料供給低開発諸国に進出した多国籍企業子会社とする。そのとき我々は、通例、直接投資の動機として指摘される原料支配・安価な労働力・市場支配をこの図に見い出すことができるのである⁴⁹⁾。

第 3 図



〔注〕 □ 直接投資の動機。▨ 企業内国際取引

ii 価値増殖した資本の国際化： $w-g-w/W-G-W$

第1図の領域2が示す「価値増殖した資本の国際化」⁵⁰⁾は、生産過程の国際化に伴って生じた社会関係としての資本の国際化を、総流通過程において表現するものとして提起されている。

ここで総流通過程は、その起点たる商品資本 W' の価値実現 $W'-G'$ とそれに後続する $G-W$ $\left[\frac{A}{P_m} \right]$ において、国際化した P と P を媒介する機能を果たしている。そしてパロフが問題としているのは、この媒介機能が果たされる際に生じる資本価値流通と剰余価値流通の分裂のうちに資本／賃労働の国際的階級対抗を検出することにある。この過程ではまず、国外的生産の結果である W'

49) このような多国籍企業ロジスティック・プランニングに関しては、南昭二『世界企業論』日本評論社、1976年が詳細に展開している。

50) C. Palloix, *op. cit.*, p. 162

に含まれた資本価値と剰余価値が G' に転化することによって分離の可能性を孕んだ実存形態を受けとり、ついでそれが $G'-W'$ によって補足されるとき、資本価値流通 $G-W$ と資本収入の支出 $g-w$ が現実に分裂して進行する。我がマルクスによって知る説明的形態で示せば、 $W' \left(\begin{array}{c} W \\ + \\ w \end{array} \right) - G' \left(\begin{array}{c} G \\ + \\ g \end{array} \right) - W \left\{ \begin{array}{c} A \\ P_m \end{array} \right\} - w$ が国際的次元で遂行されるのである。パロワはこの過程を、 $G-A/G-P_m$ の国際化の離面であり、また生産過程の国際化に結合した「総流通行為における剰余価値と利潤の形態 ($W-G-W$ に対抗する $w-g-w$) をとった資本主義的生産諸関係の具体化」⁵¹⁾ としてとらえる。つまり彼は、 $G-W \left\{ \begin{array}{c} A \\ P_m \end{array} \right\} \dots P$ の国際化の結果を示す資本価値流通と剰余価値=収入流通の分裂と対抗によって、資本価値維持と剰余価値生産の国際化を事後的に表現するのである。彼によれば、この剰余価値生産の国際化は利潤=収入の国際化として、「ラテンアメリカ、ヨーロッパ、アジア…におけるアメリカ資本の収入のうちに最も明瞭に現われている。」⁵²⁾したがって我々は新たに、その源泉が国際化した収入の流通 $w-g-w$ によって生産・再生産されていく階級的人格たる「国際的資本家階級」⁵³⁾ の出現を指摘しうるのである。ここに多国籍企業は、先のプロレタリアートの国際的創出と並んで、両階級的人格の敵対的矛盾として示されるのである⁵⁴⁾。

以上紹介したように、機能的アプローチⅡは、生産過程の国際化が剰余価値生産の国際化、つまり資本/賃労働関係の国際化であり、「国際的資本家階

51) *ibid.*52) *ibid.*53) S. Hymer, International politics and international economics: a radical approach, R. B. Cohen, N. Felton, N. Nakasi, J. V. Lière ed., *The multinational corporation*, Cambridge University Press, 1979, p. 262.54) 総流通過程をこのような階級対抗の視点からとらえるパロワは、『A. エマニュエルの不等価交換テーゼを、 $w-g-w$ の国際化が $G-W \left\{ \begin{array}{c} A \\ P_m \end{array} \right\} \dots P$ =階級関係から排他的に切り離され、中心部/周辺部間の価値移転について論じたものにすぎないと批判している。尚、不等価交換をめぐるエマニュエル/パロワ論争については、A. エマニュエル, C. ベトレーム, S. アミン, C. パロワ, 原田金一郎訳『新国際価値論争』柘植書房, 1981年, 第4・5章, および中川信義「国際貿易の理論」(久保新一・中川信義編, 前掲『国際貿易論』)を参照。

級」と国際的プロレタリアートの対抗そのものであること、それを「社会的資本の総循環」視座から $G-A/G-P_m$ および $w-g-w/W-G-W$ の国際化において開示した。 $P \cdots P$ の排他的・一面的固定によって示される生産過程の国外移転のもつ成長論的・物神的性格は、万国のプロレタリアートの団結の基礎理論としてとらえかえされることによって、ひとまず解体の緒についたのである⁵⁵⁾。だがここでは、いまだ資本/賃労働関係の国際化は生産力的契機と結合した剰余価値抽出の拡大条件として考察されてはいない。次に我々は有機的アプローチによってこの点を検討する。

2 有機的アプローチ

有機的アプローチは資本としての生産諸力が形成される分業編成様式を説明することによって、剰余価値抽出と階級闘争の具体的諸形態を統一的に把握しようとするものである。パロワはこのアプローチから、多国籍企業内国際分業の種差的編成において成立している資本としての生産諸力を考察の対象にのぼせ、多国籍企業形態をとった剰余価値の生産方法と国際的プロレタリアートの階層間格差構造を検討する。

もちろん多国籍企業の生産諸力は企業内国際分業のみならず、貿易を媒介と

55) 以上述べたようなパロワの資本循環の適用は、ミシャレによって流通過程偏重という批判を受けている。「残念ながら、C. パロワは国際経済の論理と〔世界経済の論理〕の断絶を拮定するために資本循環の国際化のシェーマを利用していない。その上、彼は生産よりも流通に優位を与えている。そしてこのことが、パロワをして我々には決定的とも思える帝国主義段階の特徴〔＝生産過程の国際化による資本主義的生産様式の国際化〕の把握を妨げさせているのである。事実、彼はその著作において明確に「社会関係としての資本が国際化する諸々の領域」を画定している。

その領域は、 $G-W \left\{ \begin{smallmatrix} A \\ P_m \end{smallmatrix} \right.$ 段階、および $\begin{smallmatrix} W & G & W \\ w & g & w \end{smallmatrix} \left\{ \begin{smallmatrix} A \\ P_m \end{smallmatrix} \right.$ 段階である。それゆえ資本の国際化は生産資本と関わりをもっていない。資本の国際化は社会的資本の総循環における流通の二つのモメントに厳しく限定されている。……とりわけ彼は、形態Ⅱの国際化〔＝ $P \cdots P$ の国際化〕を排除することによって、……剰余価値創出領域の脱圏域化〔＝国外移転〕を考慮に入れることを拒否しているのである」(C. A. Michalet, *op. cit.*, p. 84)。このようなミシャレの評価は、パロワが「多国籍企業を分析する際に生産資本循環範式」を重視したとする杉本前掲書(185ページ)の対極をなす。両者による正反対のパロワ評価は、「媒介たる流通過程が生産過程のうちに消え去せ……生産の自然主義が範式的結語」(平田清明「剰余(増加)価値のプロブレマティク——物象化視座と領有論的課題——」『経済系』第124集, 1980年, 4ページ)となる没概念的な $P \cdots P$ によって特徴づけられた外国籍企業を、本文中に指摘した視角によってとらえかえそうとするパロワの問題意識に即して統一されうものであろう。

する全市場連関をもその構成要因としている⁵⁶⁾。だが後者の検討は第IV章に譲り、本章では世界経済の他の歴史的諸段階と区別される現段階の特質たる企業内の国際分業構造に考察範囲を限定する。機能的アプローチIIにおいてそれ自体としては検討されなかったAとPmの国際的購買に接続する生産過程がいかに編成＝組織されるのか、それがいま問題なのである。

パロフは今日の科学技術革命時代に対応する剰余価値抽出の技術的基礎を労働過程の科学技術・情報過程化として特徴づけ、資本主義的搾取のメカニズムに規定されたこの過程の編成様式を理論的検討のための仮説として構築する。その際、彼はS・ハイマーの多国籍企業経営管理機構に関するモデルを摂取し⁵⁷⁾、次の四段階の段階間不均等＝種差性をもつ彼自身のモデルを提示するのである。(A) 中・長期の意志決定とプログラム作製、(B) 情報処理、(C) 生産および作業工程の調整、(D) 生産活動。このうちA段階のみが資本家によって保持され、B・C段階は知的プロレタリアート、D段階は肉体労働者によって担われている。このB・C段階を担う知的プロレタリアートは、協業過程化した労働過程において「集合的労働者の器官」⁵⁸⁾としての役割を果たすことによって剰余価値の生産に貢献する。彼らはエレクトロニクスと情報革命時代を体現する生産的労働者に他ならない。したがって多国籍企業は知的プロレタリアートの生産する知識、ノウ・ハウ、科学、情報の領有を剰余価値生産の必然的一契機として要請する。他方、労働過程の科学技術過程化の進展はD段階における生産活動を単純化・細分化された工程に分解する。資本がこの過程を担う熟練を解体された労働者(O・S)を必要とするのはこのためであり、

56) 外国貿易による資本としての国際的生産諸力の形成に関しては、加藤栄一「現代マルクス主義の動向」(佐伯尚美・佐美光彦・石川経夫編『マルクス経済学の現代的課題』東大出版会、1981年)を参照。

57) S. ハイマー、宮崎義一編訳『多国籍企業論』岩波書店、1979年、第II部。情報管理機構による支配のヒエラルキーを重視するハイマーでは、支配／被支配の構造が企業経営の三段階(第三段階＝日々の事業活動、第二段階＝第三段階の経営者の調整、第一段階＝目標設定と計画)の各段階ごとに貫いているのに対して、情報の階級利用を重視するパロフにおいては、本文で見るようにA段階と他の諸段階の間には質的断絶があり、後者の諸段階は労働者階級内部の階層間格差を基礎づけるものとして考察されている。

58) K. Marx, K. I., S. 531, ⑧ 804ページ。

またこのO・S 確保の要請こそ、上記工程の低開発諸国への移転を必然化するものである。すなわち、単純労働工程の国外移転としてある資本の国際化は、O・S の低賃金労働を利用した剰余価値抽出拡大のための必然的条件に他ならない⁵⁹⁾。（第Ⅱ章で見た低開発諸国製造業向け直接投資の最近の盛行は、ここにその根拠がある。）

このように多国籍企業形態をとった剰余価値の生産方法は、一部工程の国外移転を含む企業内国際分業の種差化の創出機構であり、また同時に、一方では非常に高度な質をもった知的労働と、他方では細分化され何らの熟練を要しない肉体労働をその相互補完的契機として要請するものである。それゆえ、「労働者の熟練の解体・労働過程の種差化・労働力およびその価値の生産と再生産の種差化」といった諸々の運動を通じての労働者階級の国際的種差化⁶⁰⁾は、剰余価値の形成と拡大の不可欠な条件を構成している。したがってまた、剰余価値抽出条件の拡大は、統一をめざす国際的プロレタリアートに対する資本の階級闘争が彼らの連繫＝統一を破壊し、彼らの種差化と分裂をもたらし限りにおいてのみ保障されるものに他ならない。有機的アプローチは国際化した剰余価値の現実的生産形態の中に、このような階級構造＝闘争の具体的形態が反映していることを解明し、理論化しているのである。

以上、我々は現代世界経済の編成主体として登場した多国籍企業の特徴を、相異なる三層の論理次元において検討した。だがここでは、生産過程の国際化は眼前に自明のごとく存在するものとして考察された。したがって我々は次章で、資本が世界的規模で企業内分業を編成するに至る歴史的経過を有機的アプローチから問い直すことにしよう。そこでは、第Ⅰ章で述べた外国貿易、対外証券投資、対外直接投資が資本の国際的蓄積様式のうちに位置づけられ、資本循環視座が新たな意義をもって登場するのである。（未完）

（1982・3・19稿）

59) C. Palloix, *Les firmes multinationales*, op. cit., t. II, pp. 95-120; op. cit., pp. 163-165

60) C. Palloix, op. cit., p. 164